

# 上川アイヌと漁撈

## 旭川市博物館

上川アイヌは一戸あたり数千尾ものサケを捕獲して干鮭(からさけ)に加工し、翌春に本州向けの交易品として出荷していた。そのためかれらの集落は、サケが遡上する石狩川と忠別川に面した低い段丘面上にあり、つねに洪水の危機にさらされていた。実際、旭川市発行の「洪水ハザードマップ」をみると、そこに示された危険地帯はアイヌの集落が立地する段丘面とぴったり重なっている。

このような近世の「漁民」の集落に対して、縄文時代の集落は、氾濫危険地帯を除くすべての段丘面や山地に分布している。この立地の多様性は、上川の縄文人が多様な資源を多様な形で利用していたことを示すものであり、そこにはサケ漁への特化をうかがうことはできない。かれらは「漁民」ではなく「狩猟採集民」であったといえよう。

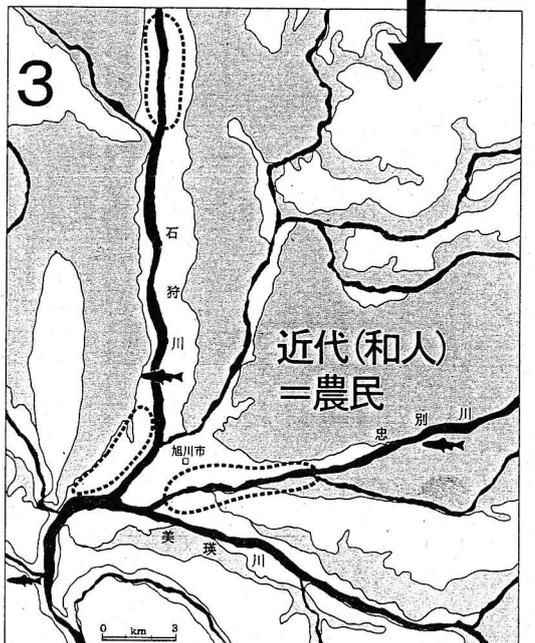
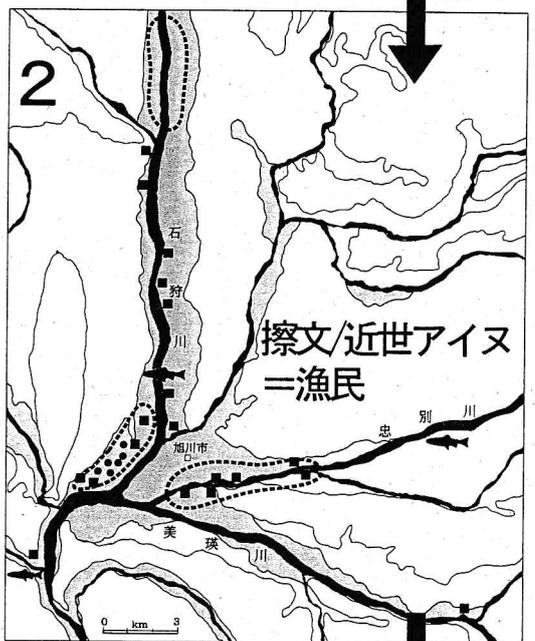
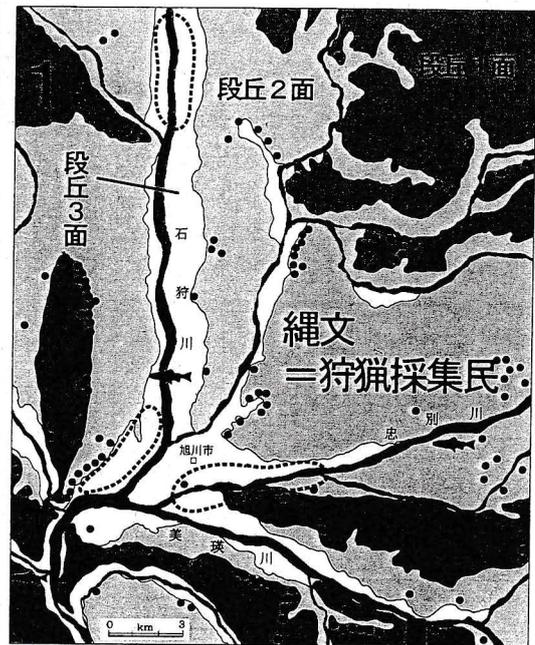
氾濫地帯に「漁村」が成立したのは9世紀末の擦文時代中頃のことであり、交易品としてのサケの出荷の始まりはこのころまでさかのぼる可能性が大きい。

明治20年代以降、上川には旭川・永山・当麻の各屯田兵村や陸軍第七師団の設置など、和人の入植が相次いだ。これらの大規模開発はすべて段丘2面でおこなわれたものであり、縄文・擦文・アイヌのいずれの集落立地とも異なっている。その集落立地は「農民」としての選択だったといえよう。

それまでアイヌの集落があった段丘3面には、アイヌの給与地が設定されたほか、遊郭・安宿などが建ち並び、馬車追いが住みつくなど、美しく条里区画された市街地とは異なる世界が展開することになった。

右図 上川における各時代の集落と立地する段丘面の変遷  
灰色で示したのは集落が立地する段丘面

- 1 縄文時代(河岸段丘1面および2面)
- 2 擦文時代および近世アイヌ(河岸段丘3面)
  - 近世アイヌの集落
  - 擦文時代の集落
- 3 近代(河岸段丘2面)



図の引用はご遠慮ください

© 瀬川拓郎